師・金子兜太　（一）

松本勇二

平成の最初の頃、八木健会長の司会する俳句番組の出演がきっかけで、「海程」主宰の金子兜太に弟子入りしました。その後、平成三十年二月二十日に亡くなるまでいろいろなことを教えて頂きました。

この稿では金子兜太という俳人が九十八年の生涯に書いた俳句を、順追って取り上げ解説したいと思います。その中で諧謔（滑稽）性の句についても触れられればと思います。

水脈（みお）の果て炎天の墓碑を置きて去る　　『少年』
死にし骨は海に捨つべし沢庵噛む　　『〃』

海軍主計中尉としてトラック島に赴任し、終戦まで多数の死者を目にしました。一句目は報告句ですが、二四歳で赴任し多くの死者を見た兜太の弔いの気持ちが書かせた一句です。二句目は悲しんで無いようにも読めますが、死への或いは戦争への怒りが沢庵をバリバリ噛ませていると取ることができます。二句とも定型を意識していませんが、固有のリズム感で読者にインパクトを与えます。

きょお！と喚いてこの汽車はゆく新緑の夜中　　『少年』
原爆許すまじ蟹かつかつと瓦礫あゆむ　　『〃』

どちらも人口に膾炙している句なので妙な解釈は不要でありましょう。前衛俳句と呼ばれた頃の句ですが、体から言葉が出ているので迫力があります。兜太は「しゃぶる」という言葉をよく使いました。季語でも言語でも徹底的にしゃぶり尽くさないと体に入らない、と解釈しております。この季節だからこの季語で、などと安易に俳句を書いているな、と稿を起こしながら反省しております。

銀行員等朝より蛍光す烏賊のごとく『金子兜太句集』
彎曲し火傷し爆心地のマラソン　　『〃』

一句目は日銀神戸支店、二句目は同長崎支店勤務時代です。蛍光灯の下で朝か

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

ら忙しく働く同僚を見て、数日前に見たホタルイカのように蛍光して見えた、とどこかに書いております。兜太の「人間の存在を書く」がこの句に表れています。存在を書くとユーモアが自然に出てくることがありますが、そういう句であると考えています。二句目は、「彎曲し」がなかなか決まらず辞書を繰っていてこの言葉に会えたそうです。言葉はどんどん降ってくるように感じる兜太も大いに推敲していたということです。

無神の旅あかつき岬をマッチで燃し　　『蜿蜿』

霧の村石を投(ほ)うらば父母散らん　　『〃』

映像を見せろ、と全国大会の講評などでよくお話されました。岬をマッチで燃やす、という壮大な映像が無神の旅という場面設定も相俟ってイメージとして見えてきます。二句目も大きな石を投げられ父母が飛び散るという、絵本の中の挿絵のような映像を見てしまいます。霧に閉じ込められた村というのも童話的効果を増長しています。

俳句総合誌で、〝兜太の一句〟のような特集を亡くなった後にやっていました。そして、

おおかみに蛍が一つ付いていた　　『東国抄』

が最も票を集めていました。この狼の句こそ映像性を獲得した代表句であろうと思います。『蜿蜿』から『東国抄』まで三十三年経っていますが、「映像性の獲得」を生涯求められたと思っております。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。